

# 人口減少・超高齢社会を見据えた スポーツとコミュニティ形成に関する研究

後藤 貴浩\*

抄録

本研究は中津江村を事例に、人口減少・超高齢社会(縮小型社会)におけるスポーツとコミュニティ形成の関係について検討することを目的とした。方法はフィールドワークおよび資料収集とし、調査期間は2011年5月～2012年1月であった。

中津江村は、一般的な農山村と同じように都市的生活の浸透と伝統的地域集団の衰退と同時に、金山の閉山やダム建設により他の地域には見られないほどの人口流出、産業の低迷が進んでいた。さらに、歴史的・地理的状况から見て村としての共同体的な統一感をもつ地域ではなかったといえる。そのような中で、旧役場を中心に、金山観光施設、スポーツセンター、そしてW杯キャンプと発展論的な地域振興の仕掛けづくりを行うことにより、どうにか村の社会経済的な基盤や交流人口の維持に努めてきた。つまり、スポーツ(W杯キャンプ)は村民に一定の社会的統一感をもたらし、雇用の場を創出したといえる。しかし、現実的には、その実体的な効果は持続的なものではなく、特に合併を機に、中津江村全体としての経済は衰退し、村民の地域活動も一見衰退しつつあるといえる。そして、W杯キャンプを記念して結成された村で初めてのサッカーチーム「レリオン中津江」も活動休止に至っている。

ところが、今回のフィールドワークで村民の地域組織活動の内実に迫ってみると、彼らの細々とした地域組織活動の中に小さな共同体が形成されていく様相と、それらが重なり合いそれを包み込むような共同体社会へと連なっていく可能性を明らかにすることができた。それは、縮小型社会における地域組織活動の重層化と中津江村独特のタノモシの関係性が土台となっていた。「レリオン中津江」は青年団や消防団、そしてパトロール隊という村の青年層の連続した地域組織活動の中で把握されるものであり、それは小さな共同体として、つまり青年層に共有された関係の在り方として存続していると捉えられるべきものであった。

キーワード：縮小型社会、共同体、頼母子講、地域組織活動

---

\* 熊本大学教育学部 〒860-8555 熊本県熊本市黒髪2丁目40-1

# A Study of Sports and Community Formation with a View to the Depopulating/Super-aged Society

Takahiro Goto \*

## Abstract

The objective of this research is to make a study of sports and community formation in a sustainable society. Field work and collection of materials were carried out during the period from May, 2011 to January, 2012.

Outflow of population and decline of industry to extents that are not seen in other regions had been proceeding in Nakatsue Village due to the closing of the gold mine and the construction of a dam. Furthermore, when viewed in light of the historical and geographical situations, it was not a region with a sense of unity as a community. Amidst these conditions, development theoretical regional promotion had been taking place such as a “gold mine tourist facility”, a “sports center” and a “World Cup camp”. As a result, a certain sense of social unity had arisen among the residents of the village, and employment opportunities were created, by sports. However, in reality, these actual effects were not sustained. It may be said that the economy of Nakatsue Village as a whole is declining, as, at first sight, are the local activities of the residents of the village. Furthermore, the first soccer team formed in the village in commemoration of the World Cup camp, “Les Lions Nakatsue”, has come to be dormant.

However, as a result of field work concerning the activities of the local organizations of the residents of the village, a new social meaning to their activities could be identified. It was the aspect of the formation of small communities in the spare activities of their local organizations. At the same time, it was the possibility that these would come to overlap with each other and become linked together toward a communal society as a whole. It was found that the foundation to this was being provided by the overlapping of the activities of local organizations in the sustainable society and by the “Tanomoshi-ko (beneficial association)”-like relationships unique to Nakatsue Village. That is, “Les Lions Nakatsue” is something that should be perceived as continuing to exist as a mode of relationships shared by the younger generation.

Key Words : Sustainable society, Community, “Tanomoshi-ko”, Local organization activity

---

\* Faculty of Education, Kumamoto University 〒 860-8555 40-1 Kurokami 2-chome, Kumamoto-shi, Kumamoto

## 1. はじめに

「小さな村の大きな挑戦」と銘打たれた2002年W杯カメルーンキャンプは、当時の中津江村を一躍全国的な知名度の村へと押し上げた。W杯終了後も、カメルーンにちなんだ物産品の加工・販売や村で初めてのサッカーチーム「レリオン中津江」の結成など多くの面で影響を与えてきた。そして現在、会場となったスポーツセンターの年間利用者数は目標の3万人を上回る38000人(2010年度)を数え、Jリーグチームのキャンプやカメルーン杯少年サッカー大会が毎年行われるようになった。低迷していた村最大の事業所でもある金山観光施設では「カメルーン中津江村キャンプ記念館」をオープンし利用者増に取り組んでいる。2010年南アフリカW杯では、日本戦に向けたマッチフラッグづくりに取り組み、試合当日はパブリック・ビューイングを開催し村民一体となってカメルーンを応援したといわれている。このようなW杯を介したカメルーンとの関係について村民が、「カメルーンは仲間という感じが強い。カメルーンの何かをしますよと言えどかなりの村民が出席しますからね。やっぱり、そのつながりというのは表面的なものではなくて、心の中で繋がっていますね」「よくマスコミなど周囲の人は今でも交流していますかとか形を求めますでしょう。実際にはそんなにないですよ。それは形ではなく思い出として残っていつているんだと思うんですよ」と語るように今なお関係性を維持している。

一方で、中津江村の人口は1970年の3,429人(世帯数:825)から2011年の1,059人(世帯数:427)へと急激に減少し、高齢化率も45.1%と非常に高い。農林業の代わりとなる基幹産業もなく、平成17年の市町村合併により村最大の雇用の場となっていた役場は日田市支所として大幅に縮小された。金山観光施設も開設当初(1983年)は494,796人の利用者を記録したものの、現在(2010年)は74,363人と大幅に減少し、W杯効果も薄れつつある。1990年に開設したスポーツセンターもそれまで2万人前後で推移した利用者数は、W杯以後3万人を超えるようにはなつたが、近年は横ばいを続けている。そのような状況の中で、2011年にはサッカーチーム「レリオン中津江」は休止状態に陥り、村民の中からは「今でも関連した行事をちょっとやっていますけど、もうカメルーンじゃ、ちょっとという感じがすね」という声も聞こえるようになった。

では、結局のところ、少子・高齢化、基幹産業の低迷などの課題が重くのしかかる“どんづまり”の村にとって、スポーツのもつ社会的意味とは一体何であろうか。これが本稿の問題関心である。

## 2. 目的

本稿の目的は、過疎農山村におけるスポーツの社会的意味を問い直すことである。それをもとに、これからの縮小型社会における新たな地域社会とスポーツの関係について検討する。具体的には、金山の閉山、ダム建設<sup>2)</sup>による水没、金山観光施設の活況とその後の衰退、W杯カメルーンキャンプ、そして市町村合併と40年の間に劇的に変化してきた中津江村におけるスポーツの社会的意味について検討する。

## 3. 研究の視点と方法

社会学者三田宗介は東日本大震災後の社会の在り方について問われ、「成長が無限に起らないと困るという経済、社会構造、そして精神構造」(成長依存)からの方向転換の必要性を説いている。彼は、成長をある種の強迫観念であり、近代社会の狂気であると捉え、私たちは成長の大爆発期を経て、安定平行期に達するか、滅びに至るか、その分かれ目に立っていると指摘している<sup>3)</sup>。また、広井(2009)は、現在を「定常化の時代」と位置づけ、「有限性」と「多様性」を要素とする新たな価値原理が求められているとする。矢作(2009)も、都市政策の立場から国内外の都市計画を取り上げ、「量的な拡大競争主義にサヨナラしなければならない」という社会的な合意が形成されつつあると指摘している。

一方、スポーツは産業資本主義の原理を中軸とする近代化過程において重要な位置を獲得し、時には現代社会を表象するものとして取り扱われるようになった。まさに現代社会のスポーツは、経済・企業原理が優先する近代化社会と歩調を合わせ拡張・拡散してきたと言えるであろう。しかし、先に述べたように果てしない成長を目指す方向からの転換が主張される中で、改めて地域社会とスポーツの関係についても検討しなければならない時期にあると考える。それは、これまでのような地域社会の発展を前提としてその機能的立場から地域スポーツの在り方を論じるのではない。そうではなく、まずは地域社会の持続可能性との関連の中で、それぞれの地域の社会構造にスポーツはどのように規定され、またどのような意味を創出しているのかを実証的に明らかにしなければならないということである。そのうえで、これからの地域スポーツの可能性と同時にその限界についても理解しなければならないということである。

では、このような視点に立った場合にいかなる分析アプローチを用いるべきであろうか。本稿では、個々のスポーツ活動を自立したもの(あるいは自立

すべきもの)として捉え、そのうえで地域社会との関係を議論するアプローチをとるべきではないと考える<sup>4)</sup>。そうではなく、それぞれのスポーツ実践が展開される社会構造や生活の在り様との関係の中でスポーツへ接近しなければならないと考える。そこで本稿では、徳野(2011)の生活農業論を参照し分析することとした。徳野は現在の農業・農村問題を生命・生活原理と経済原理の対立として捉え、従来のモノとカネに重点を置いた「生産力農業論」ではなく、ヒトとクラシに重点を置いた「生活農業論」の重要性を説いている。スポーツ界は、自らの拡張・拡散のために産業界との結び付きを強め、ますますビジネス化、メディア化、バーチャル化しつつあるといえる。まさしく経済・企業原理優先の様相を呈している。しかし、前述したように地域社会は「有限性」や「縮小化」と表現されるような時代になりつつあり、そのような地域で展開・実践されるスポーツもまずは「生命・生活原理」との関連で把握されなければならないと考える。

このような人々の生活を視野に入れた分析方法については、地域スポーツ研究においても、以前から中島・上羅(1975)、松村(1978)、松村・梅沢(1986)などによって主張されてきたが、政策的・実践的課題への対応が優先されてきた現状においては大きな流れとなることはなかったといえる。しかし、近年、生活論的アプローチとして松村(2006)や伊藤・松村(2009)などによって実証的な成果が報告されつつある。この生活論的アプローチについて前田(2010)は、「『主体的な市民』といった原子化した個人ではなく、家族あるいは生活組織(具体的には部落会、自治会など)、地域社会における社会関係の中で生きる実体的な生活者にとってのスポーツの意味を見出す」取り組みであり、「スポーツをする主体を『生活者』として捉えることによって、生活条件の変化とその内部における相互作用によって常に変化するダイナミズムの中にスポーツを位置づけて分析する」としている。本稿は、大きな地域構造の変化の中で縮小型社会へと向かう過疎農山村を対象に、人々の「生命・生活原理」に着目し、そこで展開されるスポーツの意味を問い直すことを目的としており、同様のアプローチをとることとしたい。

具体的には、大分県日田市中津江村を対象にフィールドワーク<sup>5)</sup>を行った。中津江村は、農山村でありながら、金山開発による爆発的な人口増大に伴う急激な都市化、さらには観光開発やW杯による交流人口の増大などを経て、縮小型社会へと向かう地域として捉えられる。先の三田の主張に倣うならば、まさにこれからの地域社会そして地域スポーツの

在り方を検討する上では貴重な事例研究の対象といえる。

#### 4. 結果及び考察

##### 1) 中津江村の地域社会構造と生活

中津江村は大分県西部に位置し、福岡県および熊本県との県境にある山村で、森林が93%を占めている。明治22年の町村制施行に伴い旧栃野村と旧合瀬村が合併して中津江村が誕生し、2005年の市町村合併後は日田市中津江村となっている。津江川沿いおよびその両脇の切立った山あい各集落が点在している。旧村名がそのまま大字として使われており、津江川の上流部が合瀬、下流部が栃野となっている。さらに合瀬は行政区(自治会単位)として鯛生と丸蔵、栃野は川辺と野田に分かれる。

人口動態についてみていくと、中津江村も他の農山村と同様に高度経済成長期から人口流出が続いたが、1972年の金山閉山、1973年のダム建設の影響が大きく、他に類を見ないほどの減少率を記録することとなった。1970年から2011年の人口推移を区ごとに見ると、鯛生1,217人(332世帯)→164人(77世帯)、丸蔵860人(182世帯)→190人(83世帯)、川辺995人(226世帯)→423人(168世帯)、野田357人(85世帯)→282人(99世帯)となっている。鯛生の減少が著しく、1980年にはすでに485人(167世帯)となっており閉山後急激に人口流出が進んだことがうかがえる。高齢化率(2011年度)をみても、鯛生51.2%、丸蔵57.4%、川辺45.6%、野田32.6%と各地区で大きな差がみられる。

産業構造を見ると、金山やダム工事が盛んな1970年代までは第二次産業従事者の占める割合が大きく、それと同時にサービス業等も展開されていた。しかし、これらに従事する者の大半は村外からの来住者であり、閉山、ダム完成とともに村外へと流出していった。土着の者の多くは農林業を営んでいるが、農業については、地目別面積における田畑の占める割合はそれぞれ1.1%と0.7%と耕地面積が狭く農耕経営は非常に零細であったといえる。また、林業従事者の大半は山子で、農業の傍ら植林、下草刈り、間伐に従事しているため、林業で栄えた日田地域のイメージとは異なり、中津江村民の林業による所得は低いものであった。

それでは、区ごとに地域社会構造を確認する。まず鯛生であるが、1970年に27班(概ね旧集落で構成)は2005年の日田市への合併時に8班、さらに2011年には4班となっている。区長はこの現状を「アツという間になくなっていった。自分もいつ出ていこうかと話しているんですよ。あと5年もした

「ここはホントなくなりますよ。超限界集落ですよ」と語っている。自治会の活動としては、総会のほか月一回の役員会(会長、理事など10名で構成)と敬老会行事や道路愛護活動ぐらいであり、自治会全体で何かするという事は特になくという。自治会費についても取っておらず、鯛生小学校の100年祭基金を活用しているということであった。集落ごとの常会も行われていない。金山の閉山とともに瓦解していく状況について区長は「鯛生はバラバラですよ。やっぱり金山の影響でしょうね。いろんな血が入ってきたり、そういった人との付き合いがあったりですね」と語っている。長い伝統のある地元の神社祭りについても、従来は総代がいて氏子が交代で祭りを運営してきたが、今ではそれもできず区長が毎年すべてを取り仕切っており、自分がいなくなったら祭りはなくなるだろうという。このように、閉山後、その独特の社会構造の影響もあり、一気に瓦解していく様相として受け止められる。しかし一方で、毎月の役員会開催、神社祭りへの参加、中津江村の行事への動員とそれへの対応など細々とはあるが伝統的な共同性が引き継がれている側面も確認される。

丸蔵は鯛生と同じく山あいに位置することから人口流出が激しく、高齢化の進んだ地域である。しかし、鯛生ほど村外からの来住者(=村外への移住者)の数は多くなく、徐々に進行していったと思われる。したがって、人口は大幅に減少したものの1970年に16班に分かれていた集落は2011年でも15班が存続しており、それぞれの集落で常会などの寄り合いも行われている。また後述するように地域の「頼母子講」が行われており共同性が強く残る地域であると理解される。また、青年層の集まりである「親和会」が地域運営に積極的に取り組んでおり、夏祭りの運営や中津江村の「ふるさと祭り」への出店なども行っている。自治会としては、1世帯年間6000円の会費を集め、総会のほかスポーツ大会や敬老会など様々な行事に取り組んでいる。自治会公民館の周囲には行政に働きかけて造成されたグランドゴルフ場やゲートボール場があり、その維持管理に住民が積極的に係っている。宮園集落にある宮園神社では約800年以上も続く「麦餅つき祭り」(大分県指定無形民俗文化財第一号)があり、丸蔵のシンボリック的存在となっている。鯛生と同じく金山労働者が少なからず定住していたがこのことについて区長は「都会から来た人が一気にいなくなった後は、本当の中津江の人間だけ、ここに残って住まなくちゃいけない者だけが残った。そしてどうにか集落を維持してきたんです」という答えが返された。まさに、人口減少・高齢化、そして集落の小規

模化という流れの中でも、丸蔵の人々の共同性は今なお引き継がれているともと思われる。

川辺は、役場や小学校・幼稚園などがある栃原、商店や小規模の事業所、商工会館、郵便局などがある川辺、さらに山あいに点在する集落で構成される中津江村の中心地である。1970年に19班あったが、現在も17班が存続しており、集落単位で常会や近隣の清掃活動を行っている。自治会活動も盛んで、総会のほか、月1回の班長会議があり、組織も会長、副会長、会計、体育部長、環境福祉部長、教育文化部長などの役職が決められている。特に大きな行事は、10月に開催される自治会体育部主催のスポーツ大会で計3日間実施されている。その他、日帰り研修会(毎年40名ほど参加)、年2回の防犯パトロール、年1回の防災パトロールが行われており、自治会関係の行事が月1回程度は開催されているという。年間の自治会費は7,200円となっている。日田市や熊本県小国町への交通アクセスが良く、休日には市街地へ買い物や映画、習い事(ダンスやカラオケ)などに行く人も多く見受けられ中津江の中でも都市化された生活が最も浸透した地域といえる。人口は減少しているものの、公民館のサークル活動や自主的な地域活動グループもあり、自治会の組織化された活動と合わせて比較的地域運営がスムーズに行われている地域といえる。

野田は4つの区の中で最も人口減少が少なく、高齢化率の低い地域である。しかし、もともとは山あいの集落を中心に構成されていたことから1970年の人口数はもっとも少ない地域である。水没した集落が2つあり、そのほとんどが挙家離村であったことから集落消滅、人口減少に向かうところであったが、村営住宅(現在市営)の建設により、若い夫婦世帯が移住したため班(集落)の数は1970年と同じ8班となっている。移住してきた若い夫婦世帯は村内、特に鯛生や丸蔵の上流域からの移住でありほとんどの場合その親世帯は元の区に残っている。市営住宅の占める割合は人口で40.4%(114人)、世帯数で34.3%(34世帯)となっており、山あいの住民と村内出身の団地住民の混住している地域といえる。各班(市営住宅も含む)では常会が行われており人々の関係性も伝統的な共同性が引き継がれている。しかし、自治会の活動は活発ではなく、総会と2か月に1回の役員会以外はほとんど行事等は行われていない。区長によると、市営住宅の住民は日田市などへの共働きが多く旧集落の住民とは生活時間が異なるため、自治会単位で何かやるということは難しいという。しかし、若い夫婦世帯の人々が地域のことに無関心かというところではなく、自分の出身地域(親世帯の住む区や集落)での活動には比較的取り組ん

でいるということであった。このように野田は、自治会という地域の枠組みではなく、市営団地を含む各班(集落)において一定の地域的共同性が存在しているといえる。

## 2) 地域組織活動の維持・存続

ここまで述べてきたように、中津江村の地域社会構造の変化は住民の生活や地域に対する意識に大きな影響をもたらしてきたといえる。ただし、その影響は村全体で一律に生じたものではなく、それぞれの区や集落において大きな差異が認められる。このような地域での生活が変化していく中で、村民のスポーツ組織活動を含めた地域組織活動はどのような状況にあったのであろうか。

まず、地域運営の中心となる青年層の活動についてみていきたい。現在、村にはパトロール隊という防犯組織が結成され(2008年)、4つの自治会ごとに月1回のペースで村内を巡回している。隊員は20歳代から50歳代までの28人で青年層の中核的組織となっている。独居老人が増えて空き巣などが多発したため、地元土木会社社長のMさん(39歳)が村の若者に呼びかけ始めた。全体の指揮はMさんがとっているが、具体的な活動は自治会ごとのリーダーを中心に行われている。メンバーのほとんどが村内で働いている(土木会社、農林支援センター、役場、自営業、大工など)。村の青年団は2004年に解散したが、Mさんによると「青年団のOBがいっぱいいるから、昔の青年団ですよ」という。20代の隊員に参加した理由を尋ねたところ「強制ですよ」と笑いながら答えていた。また、パトロール隊全員が消防団に入っており、W杯カメルーンキャンプをきっかけに商工会青年部を中心に結成された村で初めてのサッカーチーム「レリオン中津江」にも多くの隊員が加わっている。大半は素人選手であったが、創部2年目には郡内大会で優勝し県体に出場したという。現在はメンバーがそろわなくなり活動を休止しているが、メンバー自体は20名(村内在住は13名)ほど在籍し、結成当時のメンバーも数名残っている。初期のころは、小学生から50歳ぐらいまでの人が参加し楽しくにぎやかにやっていたという。Mさんによると、活動が低迷していった理由として、若者の数が少ないということもあるが、チームとしての目的をどうするかということを決めたことが大きな転機となったのではないかといい。当初は素人集団であったが、比較的技術のある若者が村内外からチームに入ってきたときに、勝ちにこだわるのか、楽しくやっていたのか、ということが問題となり、監督と当時キャプテンのMさんが相談して勝利を目指して取り組むことを決めたの

である。その結果、結成当時のメンバーの大半がチームを去って行ったという。しかし、現在完全にチームが消滅したわけではない。というのも、先に述べたように、村内在住のメンバー13名は全員がパトロール隊であり、消防団の団員でもある。サッカーのプレーを行うことは休止しているが、彼らは同じメンバーで別の地域組織活動を通して頻繁に顔を合わせ、サッカーの話もするし、これからチームをどうするかということも時々話題になるという。「消防団で、県大会で優勝し全国大会に出ることを本気で目指している」と語るMさんにとっては一時期だけ「レイオン中津江」から離れているだけに過ぎないのであろう。このように、村の青年層はパトロール隊、消防団、「レリオン中津江」などの地域組織において重層的に活動しており、それは以前の青年団活動からも引き継がれたものと考えられる。元青年団団長であったMさん自身、パトロール隊、消防団、「レリオン中津江」のほかにも、商工会青年部、体育指導委員、PTA会長などの活動を行っている。さらに、パトロール隊で参与観察を行った際には、その目的である防犯ということよりも、そこに参加する青年たちが情報を共有する場としての意味が強い印象を受けた。そこでは、子どもの結婚のこと、参加したお見合いツアーのこと、週末に村に現れた暴走族のこと、村の道路工事のことなどが話題となっていた。農林支援センターの勤務する者(45歳)は、大阪からUターンしてきた理由を、「ここには慣れがある」と言っていた。ほぼ同じメンバーで構成される「レリオン中津江」の活動で同じようなことが展開されていたことが推察される。それはサッカーやチームそのものに関する話だけでなく、家や家族、地域、結婚、仕事などプライベートな領域にまで入り込んだ濃密な関係性に支えられており、ある意味それは、アソシエーションとしてのサッカーチーム「レリオン中津江」が共同体化していく過程としても捉えられるのではなかろうか。彼らは、このような村の地域組織で活動する一方で、自分の住む地区や集落での活動(川辺：五和会、丸蔵：親和会)にも参加しており、さらに小さな共同体<sup>9</sup>を含めた重層的な地域組織活動が展開されているといえる。

このような状況は女性たちの活動にも見受けられる。婦人会は合併を機に解散したが、当時までは「村で何をするにしても婦人会だったわけですよ」(Gさん)というほどその存在は大きかった。解散後、地域での女性たちの活動は、地区や集落、サークル等に分散していった(一五会、女性の集い、商工会女性部など)。しかし、元婦人会のメンバーはいくつもの地域集団に属し活動しており、青年層と同じ

ようにそれぞれの活動場面で地域の情報が共有されていく仕組みがみられる。先の「レリオン中津江」と同様に目的集団である商工会女性部が今は婦人会の代替的な組織と見なされている。Gさんの「スポーツや趣味のグループは都市的な感じがしますけど、こちら(商工会女性部)は地域でまとまって活発ですね」という言葉からも共同体化した組織の様子がうかがえる。

高齢者の地域での活動でまず挙げられるのは集落の常会であろう。常会は世帯を加入単位としている伝統的地域組織の一つである。集落の衰退に伴い開催するところも減少しつつあるが、今なお多くの地域で存続されている(川辺や丸蔵ではほとんどの集落で行われている)。ただし、本来の税金常会という意味で活動しているところはほとんど見当たらず、単なる顔合わせの会(集落の積立金の回収)であったり、自治会の下部組織的な意味で維持されていたり、頼母子講として行っているところなど様々であった。伝統的地域集団は衰退の傾向にあるものの、常会は小さな共同体としての性格を維持したまま現在も維持されているといえる。

このように、任意加入団体そのものがいわゆる都市でいう目的集団として活動しているのではなく、従来の伝統的集団のもつ共同体的性格を引き継ぎながら展開されているように思われる。そして、それらの小さな共同体に村民が重層的に係ることにによって地域的統合が保たれているのではないかと思われる。このことは、本来、営利を追求する職業集団である「地球財団」(スポーツセンター及び金山観光施設の管理運営を行う第三セクター)の在り方からも推察される。金山観光施設所長のHさんは「昔の中津江村がここにはあるんですよ。昔の村の人はここを拠り所にしてるんですよ。村の人のために雑貨屋やったり、冠婚葬祭やったりですね。よう分からないぐらい何でもやっていますよ」と語っている。つまり、「地球財団」は、基幹産業のない村にとって貴重な雇用の場となっているだけでなく、その機能を少しずつ変化させ共同体的な性格を帯びつつあるといえる。

ここまで見てきたように、中津江村では、様々な地域組織の結成・消滅という流れの中で、村民の地域組織活動が重層化しつつあるということが分かった。そして、それらの地域組織の社会的意味を考えた場合、従来の機能集団や基礎集団などの組織分類で単純に類型化できないということが示唆される。つまり、中津江村の地域組織の中には、明確な目的を持つ機能集団であっても、消滅した過去の地域組織を含む他の地域組織との関係の上に成り立つものが多数存在し、それが徐々に共同体的性格を

持つようになるのではないかとということである。このような小さな共同体が現れる背景には、前述したメンバーの重層化があると思われるが、それ以外にも村独自の組織原理のようなものが存在しているように捉えられる。それは頼母子講<sup>7)</sup>の存在である(以下、タノモシと表記する<sup>8)</sup>)。

中津江村でのフィールドワークを通して最も驚かされたことは、このタノモシが若い世代を含め盛んに行われており、人によっては複数のタノモシに参加しているということである。筆者が参与観察した丸蔵のタノモシは比較的伝統的な方法に近いものであった。このタノモシは30年以上続くもので、現在15人22口(一口2万円)で毎月開催されている。「合わせくじ」でその月にお金を受け取る2名を決め、受け取った人は翌月から利子の500円を加えて払っていくことになっている。参与観察した際のタノモシでは、一人の男性が夫婦でお伊勢参りに行くということで受け取りたがっていたが、実際には他の人が引き当てたため、他のメンバーに保証人(大抵はオヤ)になってもらい譲り受けていた(満額ではなく、これから先の利子分を差し引いた金額を受け取る)。しかし、このようなケースはそれほど多くないようであった。今日では山村であっても、金融機関が発達し、何がしかの定期的な収入源(年金や給与)が確保されているため、金銭的な相互扶助の意味合いは薄くなっているからである。ところが、ここ中津江ではこのようなタノモシが長年続けられ、数は少なくなったがそのお金を必要とする人が存在するのである。掛け金のやり取りが終わった後は、宴会へと移る。昼食をとりながら酒をかわし小1時間ほどの雑談が繰り広げられる。話の内容は、先のパトロール隊の懇親会と同様、地域のこと、農作業のこと(手伝いをしてほしいなど)、そして互いの暮らしぶりなどが中心である。ほどなくするとゲートボールのリーダーらしき人が、隣のコートで準備を始め食事を終えた人が順次集まり、プレーが始まる。ゲートボールの最中も地域のことや老人クラブのことなど取り留めもない話が繰り広げられ、なんとなく終了していく。また、比較的若い人たちの間では、このような伝統的なやり方に近いものではなく、月1回メンバーが集まり、積立金が集まった時点で旅行に行くものや毎回順番で集まったお金をもらうものなどがあるということであった。Gさんのご主人(自営業)は、地域の人たち、ゴルフ、仕事関係など合わせると8つのタノモシをしており、それぞれに方法は異なるということであった。タノモシに集うメンバーの関係について、鯛生の区長は「タノモシは強烈な関係がないとできない。1回で二十万円ぐらいのお金が動くでしょ。それこそもら

った翌月から来ないというのでは困るでしょ。だれも知らん人は入れないでしょ」と語る。川辺の区長も同様に「比較的近い世代であつまるが、世代の異なる若い人も入っている。次の世代の人には積極的に道を譲るが、酒の注ぎ方やしきたりについては私たちがちゃんと教えますよ」とその関係性の強さを示していた。また、野田の区長は「友人まではいかないけど、仲間という感じですよ」という言い回しをしている。つまり、友情といった感情的側面だけで結ばれるのではなく、同じ地域に住むあるいは趣味を持つ、仕事を持つ仲間としての関係性のことを指しており、それぞれの共同性をベースにした関係性とでもいえるものではなかろうか。

このように、中津江村には今でも世代を問わずタノモシを作り上げる関係性が存在しており、そのような関係の在り方が基層となり、地域組織活動が重層化することと合わせて、地域集団の共同体化を導いているのではないかと推察される。内山(2010)は「都市の共同体はお金を用いた助け合いの仕組みを講というかたちで作りだしていた。私有財産であるお金を他者のために使う仕組みを、である。自分たちとともに生きる世界をつくりあげるためには、それが必要だった」と述べている。まさしくそのような関係性が今の中津江村には存続しているといえる。ただし、それは村全体を統一するような大きな共同体ではなく、自分の身近な範囲(集落、仕事仲間、趣味仲間、同世代など)での小さな共同体である。それらが重なり合い、結果的に村の共同体へと連なる可能性を持つということである。そして内山はあるグループが共同体的性格を帯びるようになるかどうかは、そのグループの『内発的発展』によるものではなく、そのグループを包む共同体との関係にあるということである」としている。さらに、共同体社会でないところに生まれたグループは共同体化することも可能であるという。それは「そのグループの『内発的発展』だけではうまくいかないことには変わりはなく、小さなグループが積み重なって、全体として共有された世界を見出していくというプロセスが必要」であるとしている。まさしく、中津江ではこのような状況が確認されたといえるのではなかろうか。旧村、各区、また集落ごとに非常に格差のある中津江村では、全体を包む一つの大きな共同体が存在しなくとも、小さなグループが積み重なり、共有された世界へと連なりつつあるといえるであろう。

## 5. まとめ

本稿では、まず急激に縮小型社会へと移行した中

津江村は、一般的な農山村と同じように都市的生活の浸透と伝統的地域集団の衰退と同時に、金山の閉山やダム建設により他の地域には見られないほどの人口流出、産業の低迷が進んでいることを確認した。さらに、旧村である栃野一合瀬、また現自治会(旧小学校区)である鯛生一丸蔵一川辺一野田の間にはその地域社会構造の違いから、人々の暮らしぶりや意識には大きな格差が生じていることも分かった。言い換えるならば、中津江村は歴史的・地理的状况から見て村としての共同体的な統一感をもつ地域ではなかったともいえる。そのような中で、旧役場を中心(そこには村のリーダーの多くがいた)に、金山観光施設、スポーツセンター、そしてW杯カメルーンキャンプと発展論的な地域振興の仕掛けづくりを行ってきた。そのような取り組みを通して、どうにか村の社会経済的な基盤を維持し、交流人口の維持に努めてきたといえる。そしてスポーツ(W杯キャンプ)は村民に一定の社会的統一感をもたらしたといえるであろう。さらに、スポーツセンターが少ないながらも黒字化し、地球財団が村の貴重な雇用の場となっていることも評価される点であることは間違いない。

一方で現実的には、その実体的な効果は持続的なものではなく、特に合併を機に、中津江村全体としての経済は衰退し、村民の地域活動も一見衰退しつつあるといえる。W杯カメルーンキャンプを記念して結成された村で初めてのサッカーチーム「レリオン中津江」も活動休止に至っている。ところが、今回のフィールドワークでは、村民の細々とした地域組織活動の中に小さな共同体が形成されていく様相とそれを包み込む共同体社会へと連なっていく可能性について明らかにすることができた。それは、縮小型社会における地域組織活動の重層化と中津江村独特のタノモシの関係性が土台となっていることも分かった。「レリオン中津江」は青年団や消防団、商工会青年部、そして現在のパトロール隊という村の青年層の連続した地域組織活動の中で把握されるものであり、それは小さな共同体として、つまり青年層に共有された関係の在り方として今なお存続していると捉えられるべきものである。

では、そのような小さな共同体が形成される過程においてスポーツはどのような意味を持つのであろうか。最後にこのことについて検討しておきたい。従来、地域スポーツ研究では実践的・政策的課題への対応が優先され、スポーツ組織活動を独立したものと設定したうえで地域社会への機能が議論されてきた。森川(1975)は、スポーツ活動が地域社会形成へと係っていくためには、スポーツにおける経験を通じた地域主体性形成こそが重要であると説



き、近年では、松尾(2010)が、スポーツを基盤としたコミュニティ形成を考える場合、重要なことは、自律的連帯主義に基づく「地域性」「場所性」「共同性」がいかに立ち上がってくるかであると述べている。つまり、スポーツによる個人の発達、あるいはスポーツ組織活動において公共圏を創出<sup>9)</sup>することこそが地域社会形成への条件となるのである。このような視点で「レリオン中津江」を見た場合、その社会的意味を検討することはかなり困難なことといえる。しかし本稿では、他の地域組織活動との関連の中でその活動を歴史的に捉え直すことにより、青年層に共有された関係の在り方の継承というこれまでとは異なる社会的意味に気づくことができた。その時、スポーツはどのような役割を担うのであろうか。内山(2010)は「小さな共同体というものを軽くとらえている。とりあえずは結びつくグループぐらいに考えておけばよい」と述べている。このことを考慮するならば、スポーツの気軽さと実体的関係性の在り方<sup>10)</sup>が、人々を結びつけていくグループの形成に重要な役割を果たしていたと理解されるのではなかろうか。W杯サッカーという華やかな場面で、サッカーを通して元青年団のメンバーを中心に村の青年層が結びつけられたチームは、カタチとしては消滅しつつあるが、そこで共有された関係性は現在のパトロール隊へと引き継がれたとみられる。地域社会への機能を前提に地域のスポーツ組織活動を論じるならば、そのあるべき姿に到達しないスポーツ組織活動は発展のための課題を突き付けられるか、社会的意味のないものとして捉えられるであろう。しかし、厳しい地域課題に直面しながらも地域の活動を維持・存続させてきた農山村では、存在すること自体に意味のあるものが多いことに気づかされる。家や集落、常会などは典型であろう。今回のフィールドワークを通してみてきた様々なスポーツ活動(レリオン中津江、タノモンにおけるゲートボール、川辺のスポーツ大会など)は、何がしかの機能というより、その存在自体に意味のあるものであった。日本社会全体が縮小型社会へと転換する中で、改めてこのような地域スポーツの意味を掘り起こすことによって、持続可能な地域社会におけるもう一つの地域スポーツ論の展開が可能になるのではなかろうか<sup>11)</sup>。そのためには、今回議論することができなかった、中津江村の地域再編とスポーツ実践の関係について継続して調査しなければならないであろうし、さらに伊藤・松村(2009)がいう「潜在的な共同性」との関連において、都市空間を対象にした議論へと引き継がなければならないと考える。今後の課題としたい。

## 注

- 1) 鯛生金山は明治時代に発見された金鉱山で、最盛期(1934年～1938年)には、年間産出量日本一に達した。1972年に閉山したが、1983年に地底博物館として開館し(2000年に道の駅登録)、周辺の家族旅行村と合わせて金山観光施設となっている。
- 2) 1973年に完成した筑後川水系の下釜・松原ダム。ダム建設に伴って繰り広げられた日本最大級のダム反対運動「蜂の巣城紛争」の舞台としても知られている。
- 3) 2012年1月13日の熊本日日新聞インタビュー記事による。
- 4) 都市社会学者の鈴木(1986)もスポーツ分析の問題性を「それだけ独立の行動状況として、他の諸生活行動から切り離して把握する近視眼的な危険性にある」と指摘している。また、広田ら(2011)も同様に「スポーツを歴史的・社会的に意味づけられた活動として見たときに、他の諸活動との間で選択される活動の一つとして考察していく視点を持つことが必要ではないだろうか」と指摘している。
- 5) 本稿では2012年5月～2013年1月の間、計51日に渡り現地調査を行った。調査期間に行った主な参与観察、聞き取り調査は以下のとおりである。  
 参与観察：M 地区頼母子講、パトロール隊巡回、パトロール隊(青年団・消防団)懇親会、T 地区神社祭り、K 地区神社祭り、K 地区スポーツ大会(軽スポーツ)、K 地区スポーツ大会懇親会、ふるさと祭り  
 聞き取り調査：S さん(中津江村元村長)、H さん(元スポーツセンター所長)、M さん(パトロール隊隊長)、G さん(主婦、61歳)、丸蔵区長(元役場職員)、鯛生区長(元郵便局局长)、川辺区長(自営業)、野田区長(元役場職員)
- 6) 内山(2010)は、共同体とは「共有された世界をもっている結合であり、存在の在り方」であり、「共有されたものを持っているから理由を問うことなく守ろうとする。あるいは持続させようとする。こういう理由があるから持続させるのではなく、当然のように持続の意思が働くのである」としている。また、これまでのような地域のメンバーが統合されていると考える地域共同体論の問題点を共同体に暮らす人ではなく、共同体を観察した人たちが書いた地域共同体論にあるとしたうえで、共同体を二重概念だとし、「ひとつひとつの小さな共同体も共同体だし、それらが積み重なった状態がまた共同

体」であると述べている。そしてこのような共同体を「多層的共同体」とする。また、数多くの農山村を歩いてきた経験から、近代化を果たした現在も共同体はその命脈を閉じたわけではなく、共同体を維持しようとする意図が村人のなかには存在しているとしている。

- 7) 講は江戸時代に「遊行」を禁じられた修験者が各地に定住し、住民を組織する形で広がったとされる。内山(2010)によると、講は信仰集団であると同時に娯楽集団であり、また助け合い集団でもあったという。つまり、小さな共同体としての役割を果たしてきたのである。
- 8) 中津江村の頼母子講は、本稿に示すように本来の意味から大きく変化していることがうかがえる。そこで本稿では村民たちが表現するように「タノモシ」と表記することとした。
- 9) 松尾(2010)は「公共圏の成立を意図的、自覚的にクラブづくりの視点として組み込むことが重要なのである」としその内発的発展に期待する。
- 10) 川辺のスポーツ大会の懇親会に山あいの小規模集落から参加していた高齢女性は「こういうことがないとなかなか出て来られないですからね」と言っていた。
- 11) このことに関連し、すでに中島(1979)は、スポーツが持つ意味や価値はあらかじめ決定されてあるのではなく、その意味や価値を解明することそれ自体が研究テーマであり、むしろ、地域のスポーツ意味や価値を解明することは地域のスポーツ研究の基本的なテーマの一つであるとの見解を示した。しかし、実際には地域スポーツに関わる実践的・政策的課題解決が優先されるあまり、それほど多くの研究成果を挙げるには至っていないといえる。

#### 参考文献

- 広井良典(2009) コミュニティを問い直す：つながり・都市・日本社会の未来。筑摩書房：東京。
- 広田照幸・河野誠哉・澁谷知美・堤孝晃(2011) 高度成長期の勤労青少年のスポーツ希求はその後どうなったのか：各種調査の再分析を通して。スポーツ社会学研究, 19(1)：3-18。
- 伊藤恵三・松村和則(2009) 団地空間における公園管理活動の展開とその変容：垂水区団地スポーツ協会の事例一。体育学研究, 54(1)：107-121。
- 前田和司(2010) スポーツ社会学における「生活論アプローチ」の課題。第19回日本スポーツ社会学抄録集：24-25。
- 松村和則・梅沢佳子(1986) 「コミュニティ・スポ

ーツ」論の社会学：「自己反省の社会学」(Reflexive Sociology)に触発されて一。体育・スポーツ社会学研究会編 体育・スポーツ社会学研究5。道和書院：東京, 49-70。

- 松村和則(2006) メガ・スポーツイベントの社会学。南窓社：東京。
- 松尾哲矢(2010) 「つながり」の方法としてのスポーツクラブとコミュニティ形成。松田恵示・松尾哲矢・安松幹展編 福祉社会のアミューズメントとスポーツ：身体からのパースペクティブ。世界思想社：京都, 164-186。
- 森川貞夫(1975) 「コミュニティ・スポーツ」論の問題点。知育社会学研究会編 体育社会学研究四 コミュニティ・スポーツの課題。道和書院：東京, 21-54。
- 中島信博・上羅広(1975) 地域社会におけるスポーツ：香川県坂出市林田地区における事例研究。体育社会学研究会編 コミュニティ・スポーツの課題。道和書院：東京, 67-86。
- 中島信博(1979) 社会体育論再考。東北体育学研究, 1(1)：19-23。
- 徳野貞雄(2011) 生活農業論：現代日本のヒトと「食と農」。学文社：東京。
- 内山節(2010) 共同体の基礎理論。農山漁村文化協会：東京。
- 矢作弘(2009) 「都市縮小」の時代。角川書店：東京。

この研究は笹川スポーツ研究助成を受けて実施したものです。

